

【シンポジウム趣旨説明】

「群集」を再訪する——ただしパトスなしに

両大戦間期ドイツ語圏の文学における群集表象の再検討

本シンポジウムは、2000年代以降に人文学諸分野で生じた群集（Masse）という主題の再浮上とそれに伴う19世紀末以来の群集をめぐる思考の枠組みの捉え直し、および集団の行動に関する新たな知見の形成を視野に収めつつ、両大戦間のドイツ語圏の文学にみられる群集表象を再検討することを試みる。

政治哲学の分野では、とりわけ2010年代以降、「占拠」を主要な形態とする集団的な政治行動や、中心的な指導者や指揮系統を持たずソーシャルメディアを駆使して流動的に展開する抗議活動を背景として、「集会（アセンブリ）」や「蜂起」といった人々の共同行動をめぐる理論が練り上げられてきた（Butler 2015, Hardt & Negri 2017, Unsichtbares Komitee 2014）。またポピュリズムの隆盛を背景として、ル・ボンやフロイトの群集心理学の読み直しも活発化している。

他方、2000年代以降に急速に発展した群れの振舞いをめぐる科学研究の知見（中枢的・階層的な統御を必要としない自己組織化の能力としての群知能の発見）もまた、人文学における群集や集団の考察に無視し難い影響を及ぼしてきた（Vehlken 2012）。

こうした動向に呼応して、ゲルマニスティクおよび文化研究においても、特に2000年代後半以降、群集という主題への注目が再び高まっている（Vogl et al. 2007, Gamper 2007, Lüdemann et al. 2010, Zeller 2011, Wagner et al. 2014, Gumbrecht 2020）。

集団の行動をめぐる上述の二つの新しい思考の潮流は、かつて群集の名のもとで論じられた事象を扱いながらも、主権的主体（思考と行動の能力を所有する自由な個人）と主体たり得ぬ集団的存在（群集）とのラディカルな対置に立脚した20世紀の思考の枠組みを根底から組み換えている。これら二つの思考の潮流は、いずれも個性と集団性の間を揺れ動く多数的存在として集団の行動を分析する。

それゆえ私たちはいま、20世紀の思考を支配した「群集」の概念が決定的に歴史化した地点に立っていると言えるのではないか。このことは、かつて「群集」という形象に不可避的に纏いついていた「共同体への憧憬」や「非理性への嫌悪」

といったパトスを共有することなしに、「群集」の文学的表象を再訪することを可能にしており、新たな仕方でそれらの表象を読み直すチャンスを提供している。

本シンポジウムでは以上の問題意識に基づいて、群集という主題に関わる両大戦間期ドイツ語圏の代表的な文学的・理論的テキスト、具体的には、ヴァイマル共和国時代の都市小説、デーブリーンの未来小説、エルンスト・ユンガーとフロイトの論考、ヘルマン・ブロッホの諸作品に現れる群集の表象を議論する。

同期と拡散の詩学—ヴァイマル共和国時代の都市小説における群集のイメージ

海老根 剛

本発表では本シンポジウム全体の問題意識を概括的に示したうえで、ヴァイマル共和国時代に書かれた都市小説に登場する登場人物の振舞いを、同期と拡散という観点から考察する。まず各発表が前提する群集の概念、および20世紀の群集をめぐる思考を規定した概念布置を明確化し、それが今世紀に生じた集団の行動をめぐる新しいタイプの知によっていかに相対化され、歴史化したのかを確認する。そのうえで本発表では群集表象の分析の一事例として、ヴァイマル共和国時代の都市小説を取り上げ「同期」の観点から考察する。同期とは、動物の群れの振舞いを対象とする自然科学的研究において提出され（Vehlken 2012）、パフォーマンス研究において人間の集団的な振舞いの分析のためにアップデートされた概念である（van Eikels 2013）。同期の概念は、諸個人がみずからの行為遂行性を保持したまま、他者や環境と相互作用するなかで、集団性と個人性の間を揺れ動く様を記述することを可能にする。ヴァイマル共和国時代の小説を群集心理学的観点から考察した先行研究（Zeller 2011）で扱われた作品を主に取り上げ、それを同期の観点から分析することで、今世紀に生じた集団の振る舞いをめぐる思考のパラダイムシフトが、文学作品の歴史的な群集表象の考察に対していかなる再読の可能性を開くのかを検討したい。

発酵する群れ、発熱するテキスト—A・デーブリーン『山 海 巨人たち』における文学的テルモグラフィー

桑田 文

未来小説『海 山 巨人たち』（1924, 以下BMG）には、労働者、移民、難民、戦士、動植物、水、炎、氷など、大量の人間や生き物や物質の集まりないし塊が頻出するが、生態学の観点からBMGの「怪物的な塊」（Bultmann 2014）について論じるブルトマンが示唆するように、そこでは個と集団や社会と自然といった近代特有の二項対立がもはや機能しない世界が顔を覗かせる。以上をふまえ、本発表では、作中で度々用いられる「発酵」（gären）という言葉を手掛かりに、拡散と凝集、あるいは増殖を繰り返す様々な「群れ」の表象を分析する。

BMGでは、例えば温度や気体を表す語彙が、アモルフな群れの性質やそこに作用するエネルギーを可視化させる。一方、無数の微生物の働きによって有機物が分解され変質する発酵現象とのつながりを指摘するMasseの語源研究（Friedrich 1999）を敷衍すれば、それ自体が解体と生成の場となって変質しつつ環境に接続される群れの動きが浮き彫りになり、統一的主体を持たない相互作用的な集団のイメージへと思考が開かれる。また、「発酵」というキータームを介することで、有機的なテキストとしての特性も見えてくる。作者が集めた当時の最先端の知が独特の文体により統一的な意味に回収されない単語の群れに分解され変質する。発酵し、発熱するテキストから生成される群れの世界は、「共同体への憧憬」や「非理性への嫌悪」といとは一線を画するものとなろう。

第一次世界大戦は史上初の「大量死との遭遇」(Mosse 1990)をもたらし、戦間期ドイツにおいて戦死者の祭祀と追悼が喫緊の問題となった。「大量死(Massentod)」とは「大量の死者たち」であり、視点を変えれば戦没兵士によって構成される「死者たちの群集(Masse der Toten)」(Canetti 1960, 1971)の在り方がここで問われていると言えるだろう。本発表は軍隊を集団(Masse)の一例として論じたフロイトの『集団心理学と自我分析』(1921)の読み直しを図りながら、両大戦間期にとりわけ戦死者の追悼という問題に取り組んだエルンスト・ユンガーの編著『忘れえぬ人々』(1928)における戦没兵士との「戦友意識(Kameradschaft)」という点に注目し、戦間期ドイツ語圏における戦死者祭祀の問題を群集の言説として捉え直す。

フロイトの集団理論との関連でユンガーをはじめとする戦争小説に言及した研究(Prümm 1974, Theweleit 1977/78, Zeller 2011)はあるが、本発表は戦死者祭祀をめぐる研究(Linse 1980, Mosse 1990, Koselleck 2023)ならびにユンガーの政治評論を追悼論という観点から翻訳し、解説した研究(川合 2016)を踏まえつつ、さらに戦友意識の変遷を論じたジェンダー史的、軍事史的研究(Kühne 1996, 2006)を参照しながら、ユンガーにおける(生者と戦死者たちとの)戦友意識の理想化された言説の特徴をフロイトの集団理論とともに明らかにする。その際に問題となるのは、戦死者たちがいかなる群集を構成していたのか、そして追悼する生者が「死者たちの群集」とどのような関係を結んでいたのかである。

近年、H・ブロッホの群集論は民主主義の後退という問題から注目を集めているが、本発表では、「共同体への憧憬」や「非理性への嫌悪」といったパトスなしに、彼のテキストに展開される群集表象に改めて目を向け、再布置することで、それらの表象が参照する射程の更なる広がりを示したい。公開書簡『街路』(1918)の三千人の歌声、『夢遊の人々』(1930-31)におけるベルリンの風景に溶け込む人々や狭い部屋に密集した労働者たち、『知られざる偉大さ』(1933)での競技場の観客の集団行動、戯曲『贖罪』(1932 成立, 1934 初演)の意識的に控えられた暴動描写や個から集団に変容する合唱のエピローグ、『ウェルギリウスの死』(1945)の群集パノラマ。これらの群集表象は「革命的群集」(Ebine 2006, 2017)の性格を備えるが、暴発には至らぬ姿勢に特徴がある。また未完の『山の小説』についてブロッホは群集内部の語り手を通して、「客観的描写」では捉えきれない群集機能を把握しようと試みた (Broch 1940 成立)。1936年に初稿は成立したものの改稿が重ねられた理由の一つは、亡命地アメリカでより積極的に受容された精神分析学が、彼の群集観に輪郭だけでなく (Kiss 2014)、群集が孕む「歪んだ癒し (Schiefheilung)」 (Freud 1921) や迫害構造を描く課題も与えたからではないか。このようにブロッホにおけるフロイト心理学の影響を顧みつつ、未解決の群集問題との取り組みが彼の思想と創作の礎となり、同時に躓きの石ともなった点を指摘する。